



TITLE:

祝辞

AUTHOR(S):

落合, 卓四郎

---

CITATION:

落合, 卓四郎. 祝辞. 静脩 2000, 36(3): 9-10

ISSUE DATE:

2000-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37553>

RIGHT:

## 祝 辞

国立大学図書館協議会会長 落 合 卓四郎  
東京大学附属図書館長

京都大学附属図書館の創立百周年記念式典に際し、国立大学図書館協議会を代表いたしまして、ひとことお祝いの言葉を申しのべさせていただきます。

まず、京都大学附属図書館の創立百周年、誠におめでとうございます。京都帝国大学が1897年に創設され、その2年後の1899年12月に附属図書館が開館し、その開館をもって附属図書館の創立とされたと同ったところでございます。その後の百年の歩みは、まさに20世紀の歩みと共にと申すことができるかと思っています。

千年以上の永きにわたり我が国の都であり文化、学問の中心であったこの地で、帝国大学がつくられ、初代木下広次総長が率先し、公家、町衆の支援のもとに、多くの貴重な図書、資料をお集めになったのを初めとして、この百年の間に多くの京都の人々の協力と尽力のもとに、文化的に、学問的に、わが国がもっとも誇れる大学図書館の地位を不動のものにしたのであります。その蔵書のなかに、多くの天災、戦乱などの消滅の危機を乗り越えてきた貴重な資料の数々があることを知るとき、大学図書館に関係するものとして、私は特別な尊敬の気持ちを持つものです。

京都大学の歴史を振り返るとき、教育・研究のそれぞれの分野で巨人を生み出してきました。私がいささか知り得る理学の分野でも、湯川先生、朝永先生、福井先生、利根川先生のノーベル賞受賞者、また広中先生、森先生のフィールズ賞受賞者を初め枚挙にいとまがありません。また社会の各界、各分野に幾多の異能、異才、有為な人材を輩出してきたことは衆目の一致するところです。東京から離れた所、自由を尊ぶ雰囲気の中で、研究者も学生も思索、勉強にいそしんだことは想像にかたくありません。そこで附属図書館とその蔵書が果たした役割は決して少なくなかったと思います。

すでに、菊池館長、長尾総長、太田文部省学



術情報課長からのお話がありましたように、これまでの歴史は、大学図書館界で指導的な役割を担ってきたことを余すところ無く示しています。私ども図書館関係者が着目する基礎データであります蔵書数、利用者数、相互協力・データベースのサービス、電子図書館化、情報リテラシーのいずれにおいてもその実績ならびに活動成果はどなたがご覧になっても素晴らしいと思われることでしょう。あらためてその成果に敬服しているところです。

このことは、菊池館長先生をはじめ図書館職員の皆様方の並々ならぬご尽力、ご支援なされている長尾総長はじめ教官の皆様、事務局や部局の職員の皆様のご努力の賜物と、心から敬意を表するものです。もって大学図書館の模範となるべきものだと思っています。

ところで、国立大学図書館協議会は、昭和43年6月に創設されました。今年で31年になります。それ以前は昭和29年から開催された全国国立大学図書館長会議という国立大学の図書館長の集まりだったようです。その前は勉強不足で分かりません。現在、国立大学99大学と放送大学の合計100大学を会員館として構成されており、通常は国大図協と呼ばれます。

大学の使命である教育・研究を支援する組織として各大学の図書館活動が的確に機能するために、調査・研究を共同して行ったり、図書の相互貸借など実質的な相互協力の推進を図っています。京都大学は創設以来副会長館として枢

要な役割を担って頂いており、日ごろより感謝しているところです。

いま国大図協はその存在意義を賭けまして大きな問題に取り組まねばなりません。すなわちインターネットなどの情報技術の飛躍的な発展は、図書館に大きな革命を引き起こしつつあります。20世紀の書物図書館が発展して、21世紀は電子図書館の時代になります。その課程で各大学図書館の資料は世界的な規模で公開・共有されることになることが求められます。一方増え続ける資料を共同で保存することが求められます。デジタル資料はwwwで共有できますし、インターネットを通して、図書の相互貸借、相互複写が簡単なプロセスで可能になります。そのために国大図協は各会員館の図書業務の言わば標準プロトコールに合意する困難な仕事に取り組まなければなりません。このプロトコールは、国立大学が現在求められています10年間で25パーセントの定員削減と30パーセントのランニングコストの削減を前提として機能することが絶対必要です。この一環として国大図協は、まだデータベース化されていない図書目録情報の遡及入力 of 早期の完成と、全国的な視野に立った全国共同利用のための保存図書館の実現に互いに協力することを決議しました。図書館の電子化に一步先んじている京都大学附属図書館

のリーダーシップに期待すること大であります。

国大図協として取り組まないといけないもう一つの問題は、少子化による大学の学習環境の変化に図書館をどう備えるかです。現在大学進学率は18歳人口の48パーセントであり、2010年ごろには90パーセントになってもおかしくないと言われる事態を想定して、大学図書館は相当に性根をいれて学習図書館の機能の強化を図らねばなりません。必然的に学習目的が多様化し、かつ能力も均質でない学生達に自学自習をしむける良い環境が必要であります。その基本は、過去も、現在も、未来も彼らが、じっくり思索にふけることが本質的に大事です。そのために、情報アクセス手段は多様になりますが、先人の思索の成果としての図書は不可欠です。各大学図書館は、学生が万卷の古典籍に加え、自由に読める新しい図書の増強を目指して様々な努力を試みているところですが、京都大学附属図書館がそのモデルとなつてほしいと願っているところです。

京都大学が益々素晴らしい成果を挙げられ、京都大学附属図書館がそこで大きな役割を果たされんことを願って、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は大変おめでとうございます。

(おちあい たくしろう)

## 京都大学附属図書館創立100周年記念式典

11月29日(月)、京都大学附属図書館開館100周年記念式典が、総長、部局長はじめ学内外の関係者200名の出席を得て、附属図書館3階AVホール(第1会場)と同4階大会議室(第2会場)において行われた。

この式典は午前11時に始まり、菊池光造附属図書館長の式辞に続いて、長尾真総長の挨拶、太田慎一文部省学術国際局学術情報課長、落合卓四郎国立大学図書館協議会会長(東京大学附属図書館長)の祝辞、工藤智規文部省学術国際

局長ほかの祝電披露が行われ、正午に終了した。

引き続き、午後12時10分から附属図書館4階調査室、同大会議室前ロビーにおいてレセプションが催された。

なお、午後1時30分からAVホール、大会議室に満席の聴衆を得て、100周年記念展示会講演「弁慶像の展開：御伽草子『弁慶物語』— 平家物語から室町物語へ —」が池田敬子京都府立大学教授を迎えて行われた。